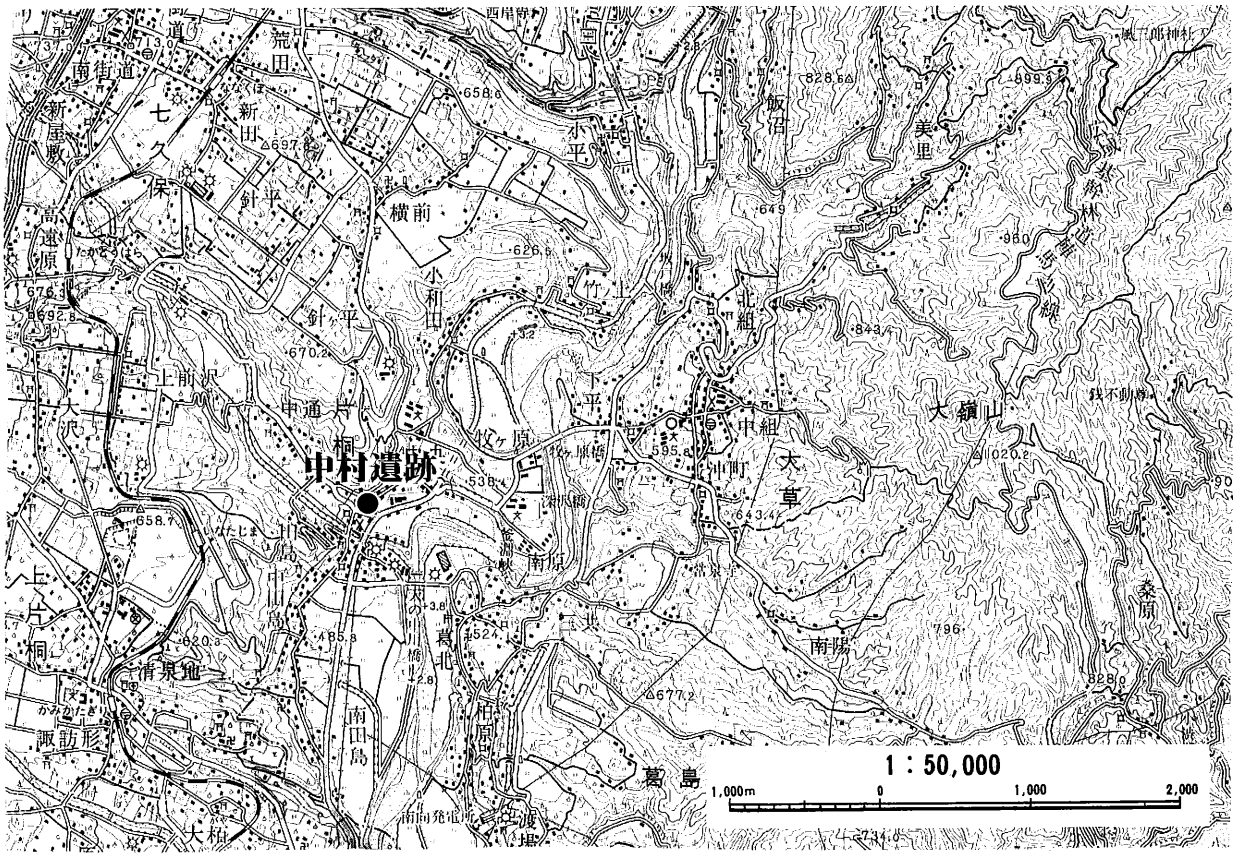
中川村埋蔵文化財発掘調査報告書　第16集

中村遺跡

第２次調査報告書



2003年９月

中川村教育委員会

例　言

1　本書は中川村片桐に所在する中村遺跡の第２次発掘調査報告書である。

2　本調査は県単緊急地方道路整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査で、中川村が業務の委託を受け、中川村遺跡調査会が実施した。

3　本調査の現場作業は、平成15年７月３日から８月20日にかけて行い、その後整理・報告書作成作業を８月29日まで行った。

4　本書の執筆は、太田保が行った。遺物の実測・トレース等は太田を中心に、小池政嗣が補助した。

5　本調査で出土した遺物、作成した図版類・写真等は中川村教育委員会が保管し、歴史民俗資料館で収蔵している。

目　次

例言・目次・調査体制 ……表紙２
調査の概要 ……２
遺　　構 ……３
遺　　物 ……５
ま と め ……５

調査体制

（遺跡調査会）

会　　長	湯沢幸雄	（中川村教育長）
理　　事	北沢正美	（中川村文化財調査委員）
	高坂清人	（　〃　）
	上山茂英	（　〃　）
	松村　隆	（　〃　）
	寺平　宏	（　〃　）
監　　事	中塚秀昭	（中川村監査委員）
	松村隆一	（　〃　）
幹　　事	石原直人	（教育次長）
	栗山良人	（文化係長）
	伊藤　修	（村誌編纂室学芸員）
	中島吹雪	（村誌編纂室事務員）

（調 査 団）

団　　長	湯沢幸雄	（中川村教育長）
調査担当者	太田　保	（中川村誌原始・古代部門専門委員）
調査補助員	小池政嗣	（駒ヶ根市）
作　業　員	シルバー人材センター	

（敬称省略）

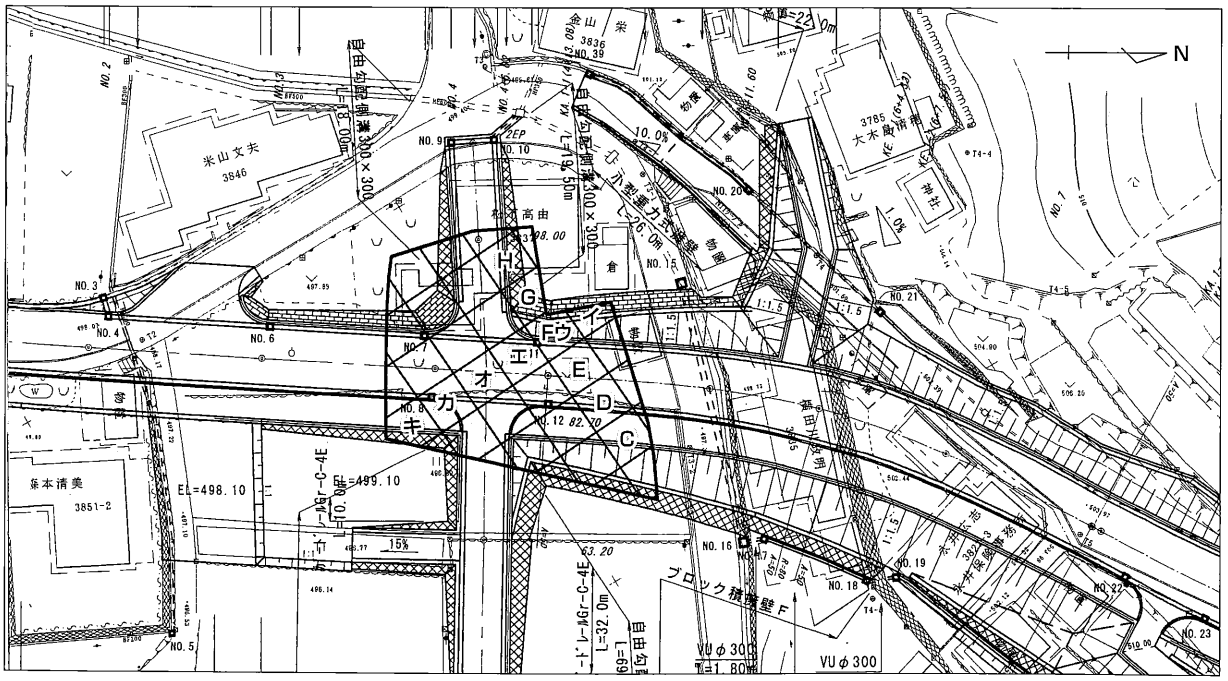


図１　調査地区位置図

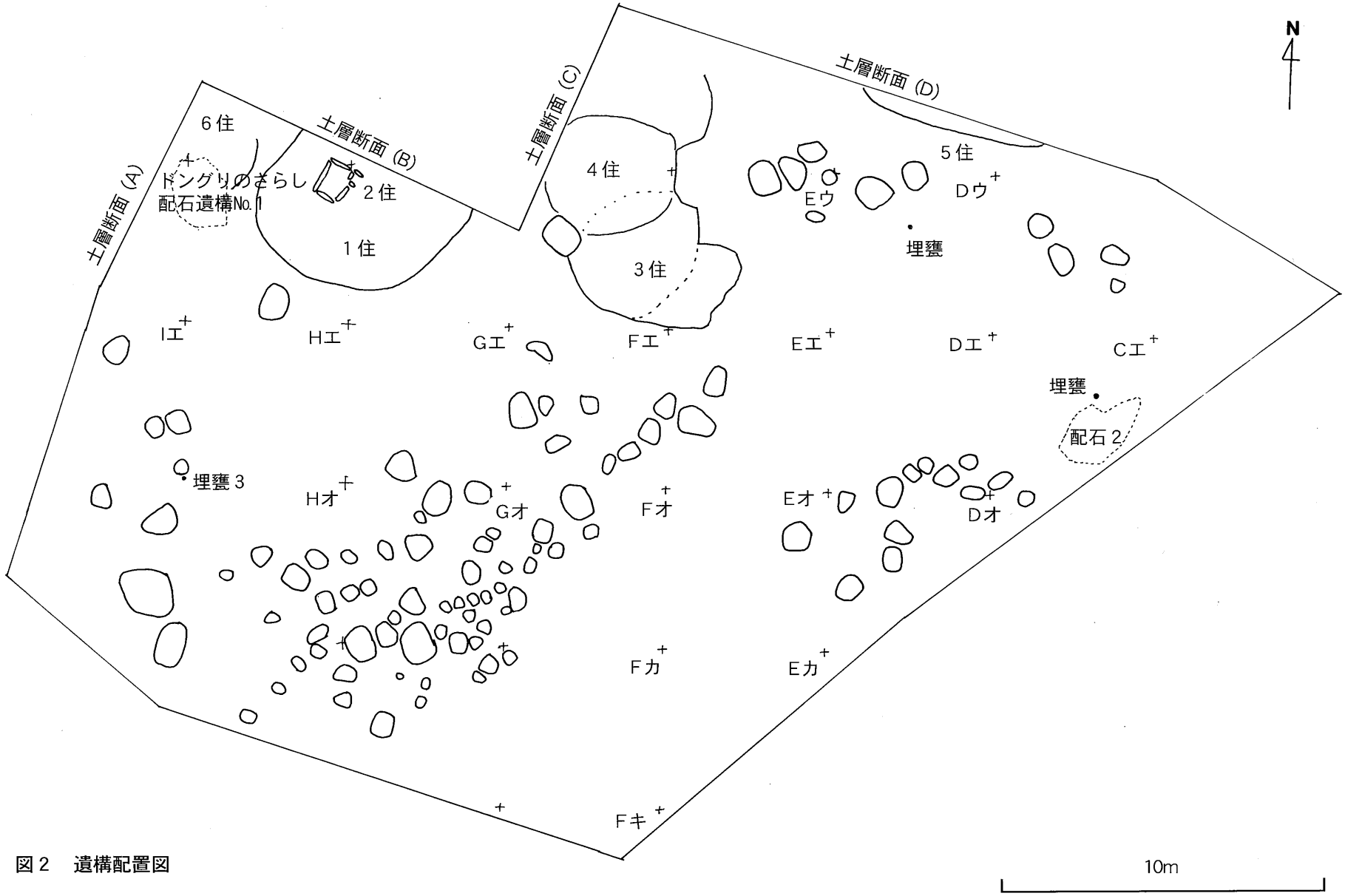

N
土層断面 (A)
土層断面 (B)
土層断面 (C)
土層断面 (D)
6住
ドングリのさらし
配石遺構No.1
2住
1住
4住
3住
5住
Eウ
Dウ
埋甕
Iエ
Hエ
Gエ
Fエ
Eエ
Dエ
Cエ
埋甕
配石2
埋甕3
Hオ
Gオ
Fオ
Eオ
Dオ
Fカ
Eカ
Fキ
10m

図2　遺構配置図

調査の概要

調査の方法

遺構が掘り込まれる土層まで、重機により表土を除去した。その後、磁北方向に沿って５ｍメッシュを設定し、南北方向にはア・イ・ウ・エ・オ・カ・キの記号を付し、東西方向にＡ・Ｂ・Ｃ・Ｄ・Ｅ・Ｆ・Ｇ・Ｈ・Ｉの記号を付し、グリット名とした。なお、遺構・遺物の検出は人力作業により行った。

遺跡の位置と概況

遺跡の位置は、片桐中央地区の国道153号線沿いとその西側一帯で、前沢川が天竜川に合流する地点の北西方向に当たる。付近には、ＪＡ上伊那の関連施設、㈱アテネ伊那工場、片桐診療所などの施設がある。

遺跡は、前沢川とその北を並行する河川（古前沢川）に挟まれた東西方向の低い丘陵に立地し、北東方向への傾斜が強い。この先は「清水」と呼ばれ、古くは天竜川が大きく浸食したと考えられる低湿地である。以前は清水が湧き出し、ワサビも作られていたという。

遺跡のある場所は、以前から東山道の堅錐（かたぎり）駅址と推定された有力な地域であったが、国道に沿って市街地が進み、また天竜川や前沢川の氾濫原であったことからそれほど注目されなかった。

昭和61年、伊南農業協同組合が「りんご選果場」を建設することになり埋蔵文化財の保護協議が行われ、２月13日から３月末日まで発掘調査が行われた。その結果、東西方向16m、南北方向38mの範囲に、古墳１基と住居址31軒が密集していた。住居址の分布状況から考えて、恐らく東西にのびる丘陵の広い範囲に密集しているものと思われた。遺構の大部分は、開田などによりかなりの部分を壊されていた。

今回の調査は、昭和61年の発掘調査地から西へ150mほど離れた場所で行われた。なお、当該調査に先立って平成14年度に遺跡確認調査を実施している。

調査地の層序と遺構

中村遺跡の調査により、この地域は前沢川の氾濫を受けて地区によりかなり地層に違いがあることがわかった。

特にＦエ～Ｉエ南の地域は、１ｍ前後の花こう岩の下層は礫の多い黄色砂層であるが、Ｅエ・Ｄエから北側は茶褐色土の固く締る土層になる。この地域は、茶褐色土層上面に縄文後期初頭期の大型土器破片と、茶褐色土層を掘り、埋甕がＣエとＤウで各１個検出した。Ｅウに焼土・灰を検出したが、後期初頭の住居址は検出されなかった。

平成14年の調査で検出しているＢウの遺構調査は、調査期間中に雨が多く、再三浸水して行えなかった。

Ｈウ・Ｇウ・Ｆウに見られる縄文中期の遺構がＥウ・Ｄウにも遺物出土があることから続いていると思われる。このことは平成14年度調査検出の出土遺物からも言える。

遺　構

住居址１

調査区西Ｇウ・Ｈウに検出された。東西6.7m、南４ｍで住居址の半分を調査し、北側半分は調査地区外になる。

主柱５と四方面を花こう岩で囲む炉址をもつ住居である。

住居址内からはＰ２壁面に石皿と磨製石斧各１、西壁から黒曜石製石鏃２、主柱穴Ｐ３上部から土偶１（写真４）が出土する。

主柱穴はＰ２・Ｐ４は、深い穴、浅い穴それぞれで２個並んで検出する。

炉址は床面を20cm 以上掘り込み、花こう岩平面を炉面に向けて埋めている。炉内は黒土で埋まる。

住居址２

焼けた住居址１を埋めて造られる。住居址１の炉址の上層に炉址を確認した。三方向囲いで炉の中央に平石を敷いた状態で検出された。

住居址は住宅の敷地で、水道工事と廃棄物穴など深い層まで掘られていたことにより、保存状態が悪かった。炉址は使用が少なく、廃棄された状態の住居址であった。

住居址３

Ｆウに検出された。

東西４ｍ、南北４ｍの楕円形の住居で炉は地床炉である。

南は黄褐色、砂層を10cm 掘る壁以外は、住居址４と土坑など後世の遺構で壊わされ、プランは不確定であった。

主柱穴Ｐ１・Ｐ３を検出する。住居址３を廃棄後、住居址４と土坑が掘られ、住居址３の主柱穴は破壊され不明である。

住居址南土坑１の南面上層から手づくね土器（高さ3.5cm、口径3.5cm）が出土する（写真４）。

住居址４

Ｆイ・ウとＧイ・ウ調査外に続く住居址である。住居址内の床面の固い部分に大型土器破片があり、軟弱地域は住居址廃棄後の土坑上部におかれた自然石が埋まっている。

住居址南Ｐ１・３・４が住居址４の主柱である。住居址の南にある長径110cm の大石、北側の平石（33×22cm）の下から中期後葉の底部に穴をあけた唐草文土器が検出された（実測図２）。

土坑Ｅウ・Ｆウは住居址床面に表われる。石は（調査終了時に確認）土坑上面に２～５個、15～35cm 楕円形自然石を組み合わせたのが土坑内に落込んでいる。内部から土器細片や打製石器が出土した。

土坑２～４例では、土坑上面は固い茶褐色土層（10～20cm）で覆われて、遺構、配石は確認できなかった。

住居址５

Ｃイ・Ｄイに黒色土の落込みを検出する。

調査区外に主体部がある住居址である。

落込み層位内水平に床面を検出することから複合住居址であるが、住居のほんの一部を検出したのみであった。

ドングリのさらし配石遺構 No. 1

Hイ・ウ、Ｉイ・ウに白色砂層下に配石遺構を検出した。配石址は黒色土層中にあり、水がよどんで流れていた。前沢川の増水で大量の砂が小川に流入して埋まっている。

縄文時代中期後葉は、ドングリを冬期の食料にしていることが知られ、保存食料として、虫ころし・あくぬきを行う作業場遺構であったと思われる。配石址上面から実測図３の土器が出土する。

住居址６

Hイ・ウ、Ｉイ・ウのドングリのさらし配石遺構下層は、固い黒漆色土層が25cm 前後堆積し、下層から焼けて赤黄色をした固い床面がＩイ北側より5.2m間検出する。焼けた床面はＩウ基点東側に住居址１壁上３ｍまで続いているが、主体部は調査区外Ｉイ・ウにある西側に続いている。

埋　甕

Ｃエ・Ｄウに各１ケ所の埋甕を検出した。Ｃエは、平成14年トレンチ調査で確認され、今回調査できた。黒茶褐色土層中に埋まる石の間を掘って埋められた２個体の土器を組み合わせた埋甕である。（土器37）

Ｄウは底の中央を穴をあけた甕を茶褐色土層に口縁部を上に埋めている。埋納は東側を広く掘り、西側は地山に土器が付く状態である。（土器32）

Ｃエ・Ｄウ共に埋納時の土層は締っていなく、埋納後上部から圧締され、土器はくの字に折れている。特にＤウは胴下部が外に開き、胴上部がつなぎ目から土器内に入り、二重組み合わせ埋納の状態で発見されている。

Ｉオ基点南から時代不明の厚手埋甕が内部に石を入れて検出した47×37の花こう岩石によりかかる状態で検出された（実測図４）。

土　坑

土坑の調査は十分な調査ができなかった。

住居址３と住居址４の確認調査から検出した土坑と固い茶褐色土層を除去中に検出した土坑が調査終了時に検出して調査を終了しているが、土坑全体についてみると、上部に15cm ～35cm の楕円形の自然石を２～５個を配置している。多くの土坑が土坑内に組石が落込んでいる。

配石址２

Ｃエの埋甕上層に配石址を検出した。

配石址の一部の調査であるが、配石に使用された石の中に石皿が２個使われていた。配石址層中から縄文後期初頭期土器破片が出土した。

時代不明の遺構

Ｉウ南半からＩエにかけて楕円形の石を南側３m、西側２ｍを直線に区切り、内側を黄色の粘土を床に固めた時代不明の遺構を検出した。大正時代、地下作業所を造られたと聞いているが、その施設の一部であろうか。

遺　物

土　器

縄文中期後葉の土器は、調査地域全体から出土する。出土土器の80％が中期後葉土器であり、縄文時代後期初頭期が続き、縄文時代前期末葉土器小破片２、弥生時代後期土器数片と須恵器・灰釉陶器と中世以後の陶器小破片を検出した。発掘調査の結果を短時間に報告する必要があり、整理は遺構中から出土する遺物を中心に行い、破片は十分に整理ができずに報告書を作成した。そのため、あるいは村内の遺跡調査で未発見の縄文中期末葉の資料があることも考えられる。今後、時間的に許されるならば、中川村誌には利用できるよう整理したい。

中村遺跡の縄文中期後葉の土器は拓本５～14に見られる口縁部に文様が集中して施文し、頸部以下単純な文様構成で施文するが、施文具・施文構成に村内での中期後葉期に見られない特長が見られる。時間差、他地域との交流の違いが土器に表われているのであろうか。

拓本18の浅鉢は、中期後葉土器破片と共伴した。大石北側の狭い調査地域からの出土で、土坑内出土の感じである。19は平成14年度に出土した調査区東北Ｃエ出土の遺物である。

拓本22～24は幅広い施文具の沈線区画、21・25の細い平行沈線文、26～32の縄文施文あとに沈線で文様帯や渦巻き文様を構成する土器が表われている。特に茶褐色土層を境にして拓本26以後の縄文地に沈線文を施文する土器群が上層にあり、前沢川の氾濫堆積後に人々が現れ、これらの土器を使用して生活したものである。土器底部も33の網底になる。

拓本37はＣエの埋甕である。埋甕上層に配石址２があり、その上部から少量の炭化物と共に写真３、拓本51の胎土の細かい、焼成の良い小型土器が出土する。３時期の文化層があった。

拓本49は住居址１柱穴Ｐ４を土坑に掘られ、その土坑下層から出土した土器である。文様から弥生時代中期中頃の土器であろうと見るが、器形の復元など再確認したい遺物である。

石　器

縄文時代中期後葉の土器に伴う石器が調査全域から出土した。短冊形打製石器80点、横刃形石器46点、割る・潰す・こねるなどの作業に使用した機能を持つ石器８点と石皿14点である。石皿は硬砂岩系が多いが、両面平な平石も10点以上確認した。こね台であろうか。

また、黒曜石片42点が集中して縄文後期埋甕遺構近くから検出された。

まとめ

縄文時代中期後葉期の住居址は、西側に広がりをみせると思われる。

縄文時代後期は、調査区東側に中心部があり、その一部を今回調査できた。縄文時代中期終末期から後期における縄文人の生活の姿を一部明らかにしたが、まだまだ不明な点が多い。今回の調査においては、住宅地跡であり水害を受けたことから生活面の検出は思うようにできなかったが、上伊那地域における天竜川の後背地という希少な立地での遺跡であることを確認できた。

また、弥生時代後期の住居址が調査区東にあることが確認でき、後期住居は過去の調査ですでに明らかになっていて、集落の広がりが今回の調査でここまで及ぶことが確認できた。集落規模が大きく、中村遺跡の一層の重要性が増した。

前沢川左岸は、現在、地表面には遺物が表われていないが、高地性遺跡では知ることのできない川に面しての、人々の生活した遺跡群が存在する歴史的にみて大変重要な地域である。

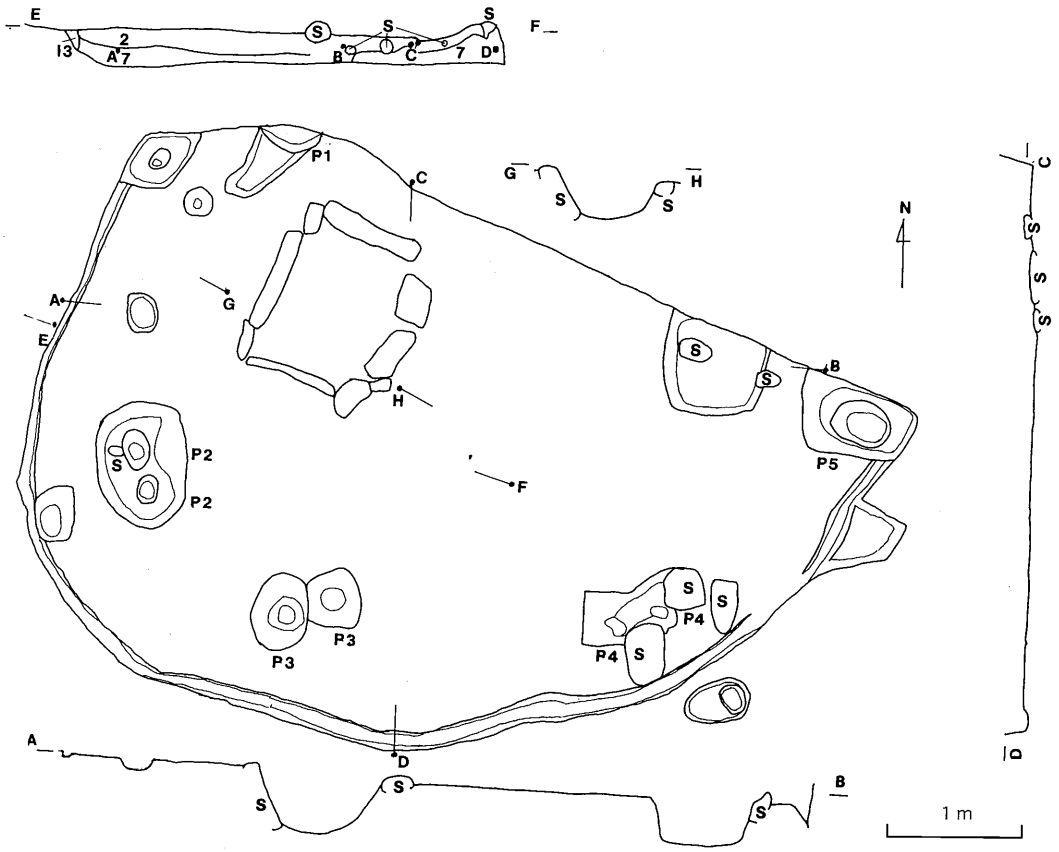


図３　住居址１

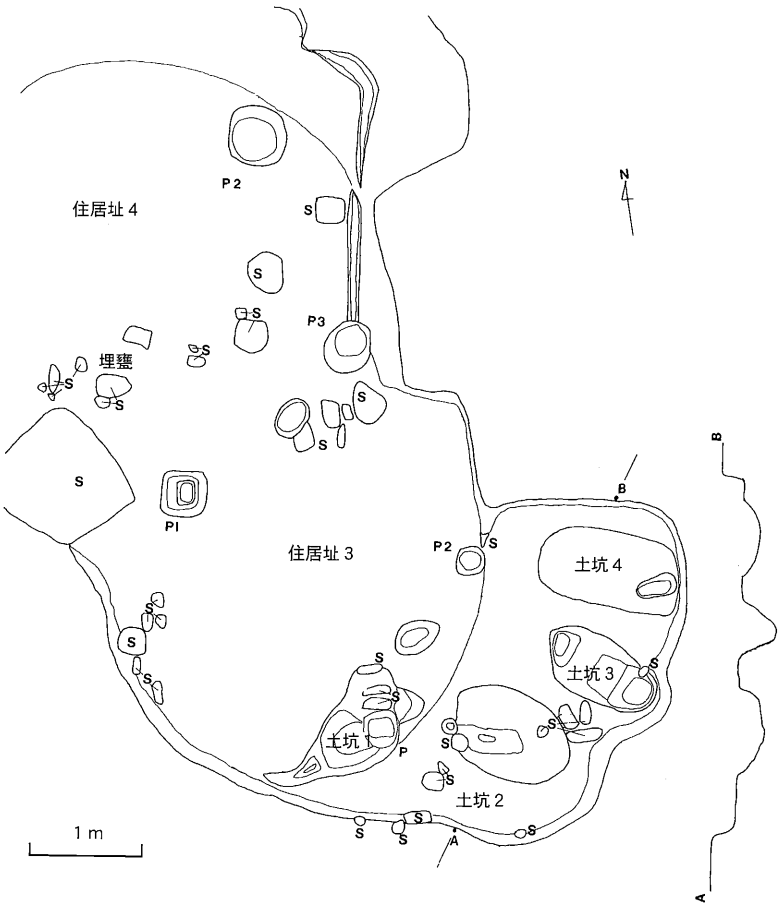


図４　住居址３・４

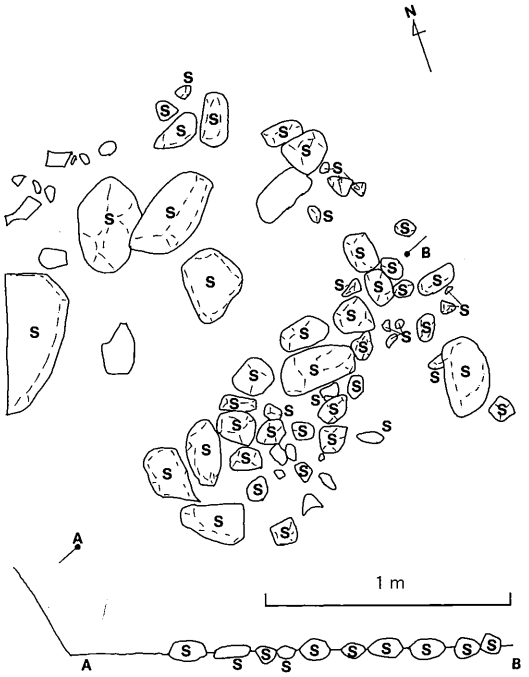


図５　ドングリのさらし配石遺構１

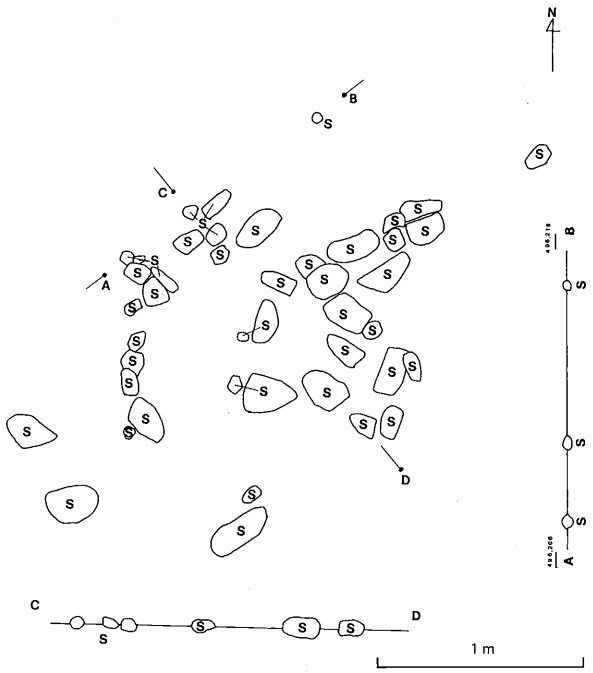
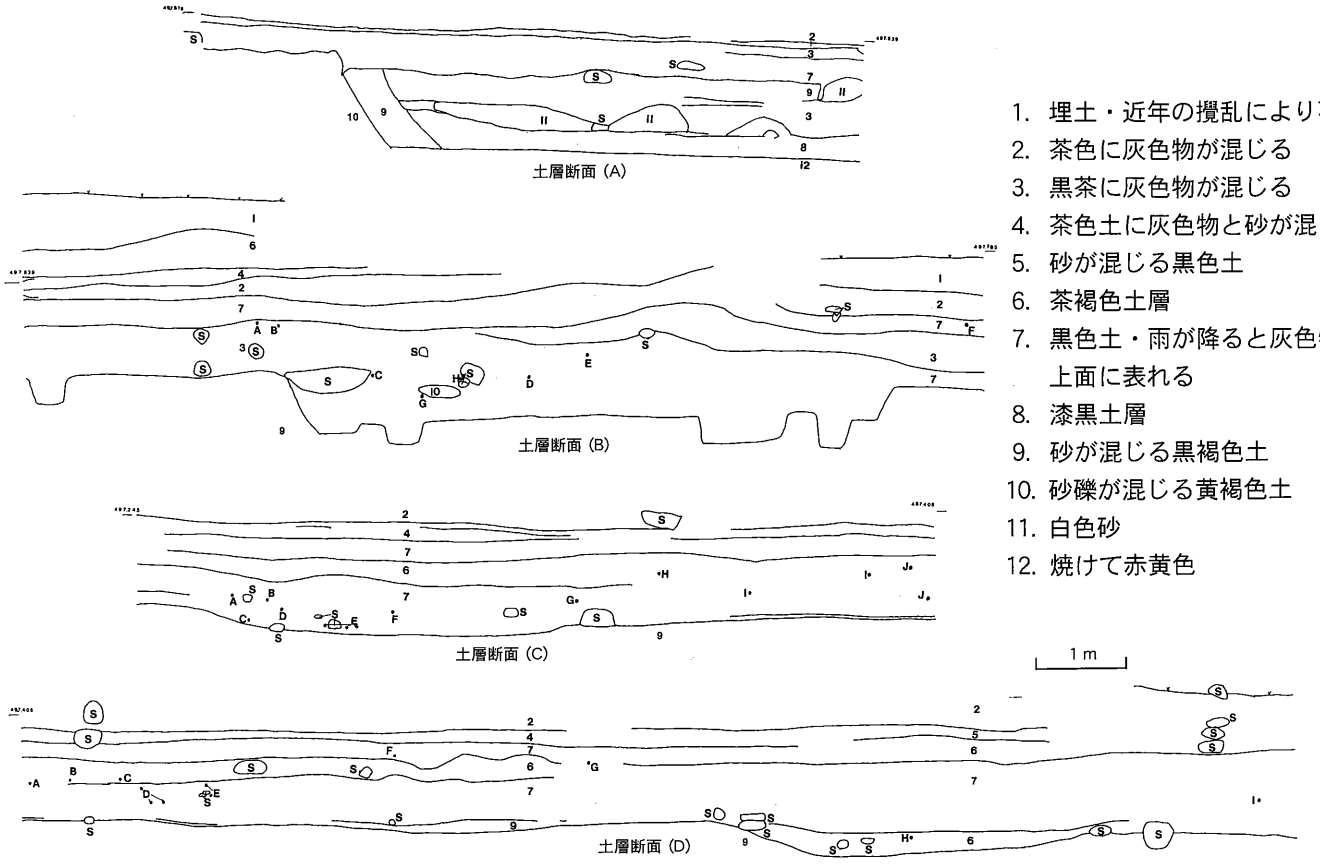


図６　配石址２



1. 埋土・近年の攪乱により不明
2. 茶色に灰色物が混じる
3. 黒茶に灰色物が混じる
4. 茶色土に灰色物と砂が混じる
5. 砂が混じる黒色土
6. 茶褐色土層
7. 黒色土・雨が降ると灰色物が上面に表れる
8. 漆黒土層
9. 砂が混じる黒褐色土
10. 砂礫が混じる黄褐色土
11. 白色砂
12. 焼けて赤黄色

図７　土層断面図

写真１　Hオ･Iオ境、大石南下に土坑を掘り土器内に石が入る。縄文中期土器

写真２　Fウ・Gラに出土した取っ手と吊手部分。

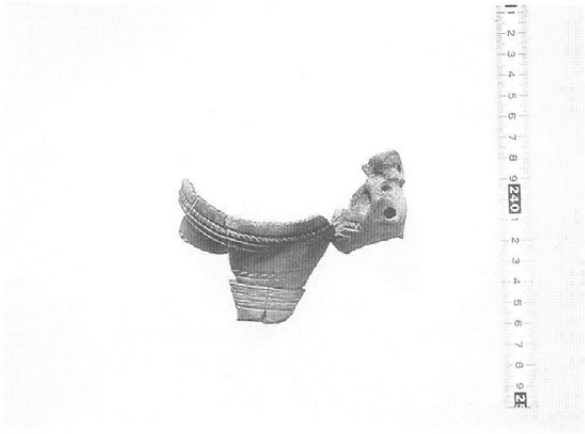


写真３　Cエ、配石址、上層、単独出土土器

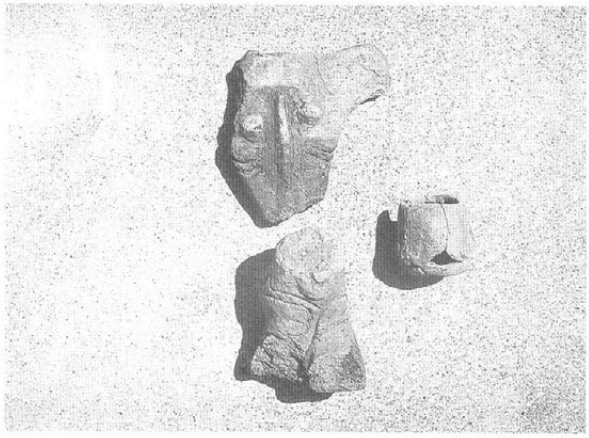


写真４　住居址１の３主柱壁より出土土偶、右土坑１出土の手づくね土器

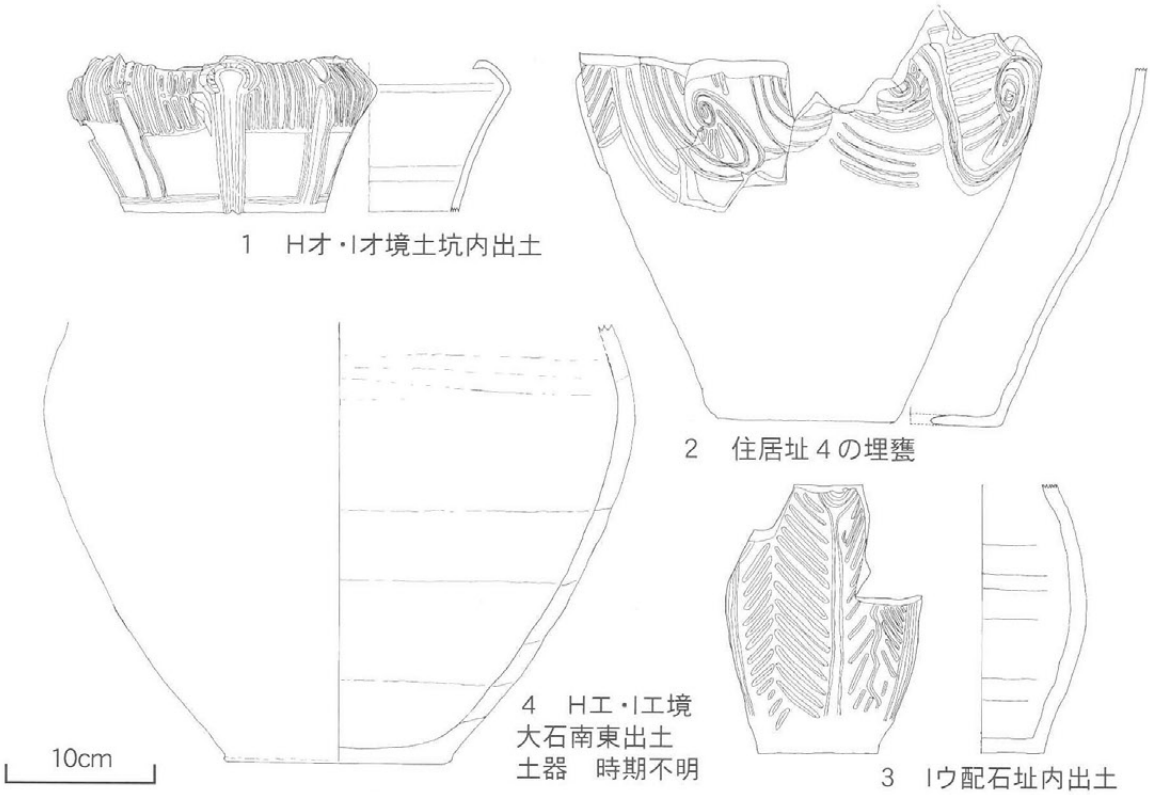


図８　出土土器（１）

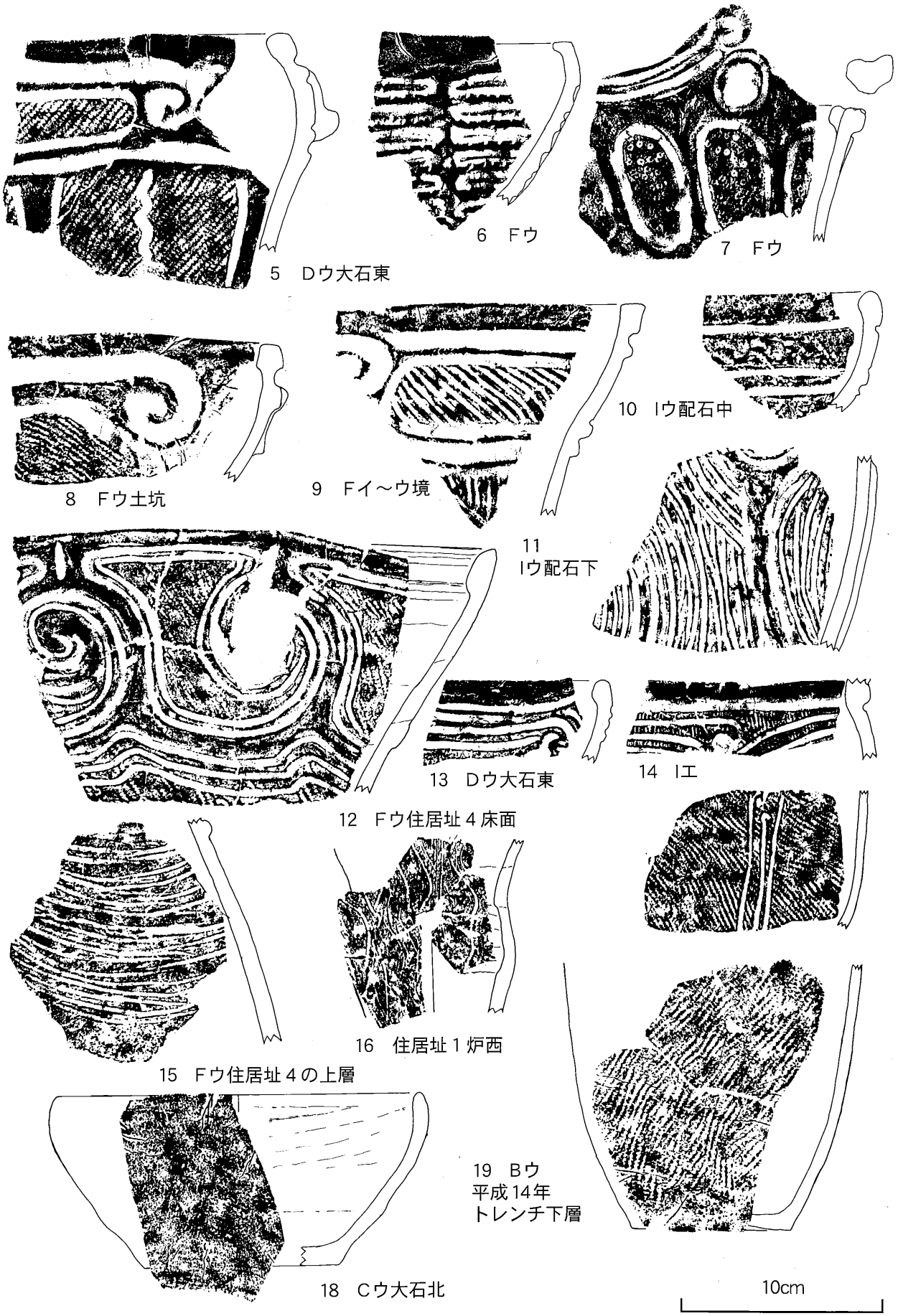

5　Dウ大石東
6　Fウ
7　Fウ
8　Fウ土坑
9　Fイ～ウ境
10　Iウ配石中
11
Iウ配石下
12　Fウ住居址４床面
13　Dウ大石東
14　Iエ
15　Fウ住居址４の上層
16　住居址１炉西
18　Cウ大石北
19　Bウ
平成14年
トレンチ下層
10cm

図９　出土土器（２）

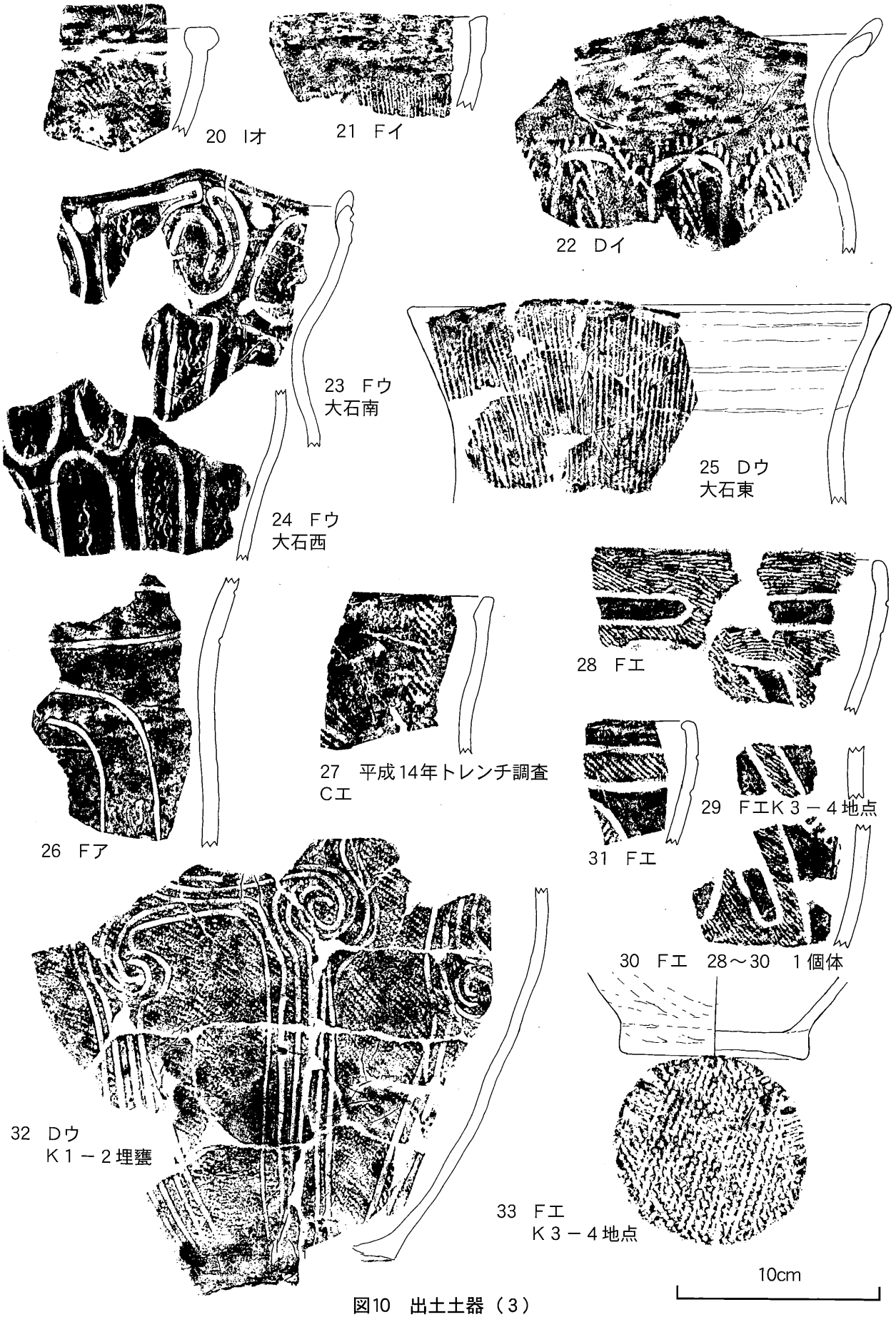

20 Iオ
21 Fイ
22 Dイ
23 Fウ
大石南
24 Fウ
大石西
25 Dウ
大石東
26 Fア
27 平成14年トレンチ調査
Cエ
28 Fエ
29 FエK３－４地点
30 Fエ 28～30 １個体
31 Fエ
32 Dウ
K１－２埋甕
33 Fエ
K３－４地点
10cm

図10 出土土器（３）

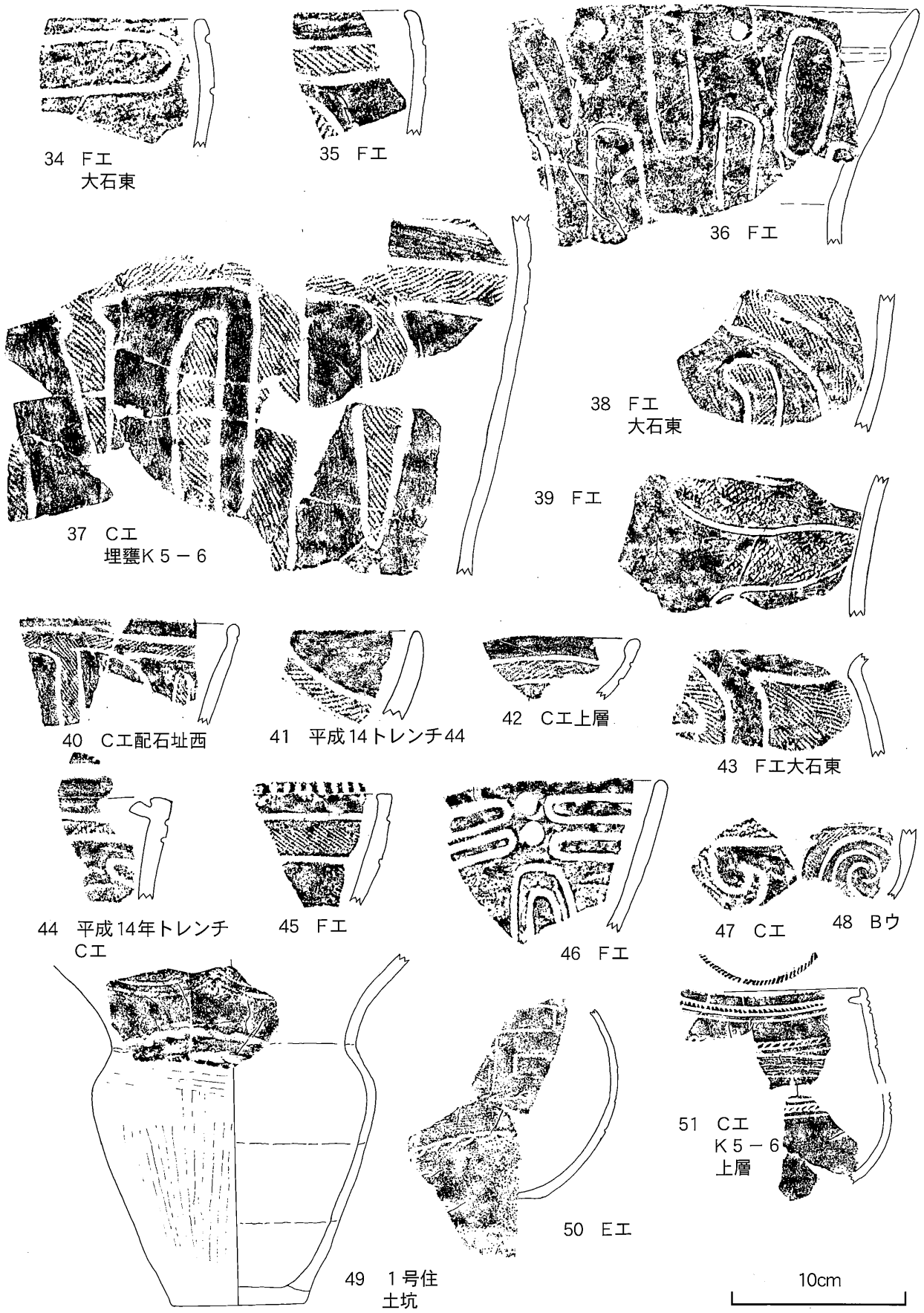

34 Fエ
大石東
35 Fエ
36 Fエ
37 Cエ
埋甕K５－６
38 Fエ
大石東
39 Fエ
40 Cエ配石址西
41 平成14トレンチ44
42 Cエ上層
43 Fエ大石東
44 平成14年トレンチ
Cエ
45 Fエ
46 Fエ
47 Cエ
48 Bウ
49 1号住
土坑
50 Eエ
51 Cエ
K５－６
上層
10cm

図11 出土土器（4）

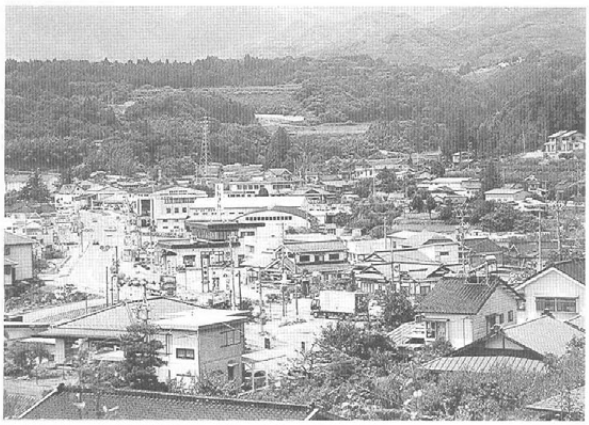


写真５　遺跡遠景（北東から写す）

写真６　遺跡近景（西側から写す）

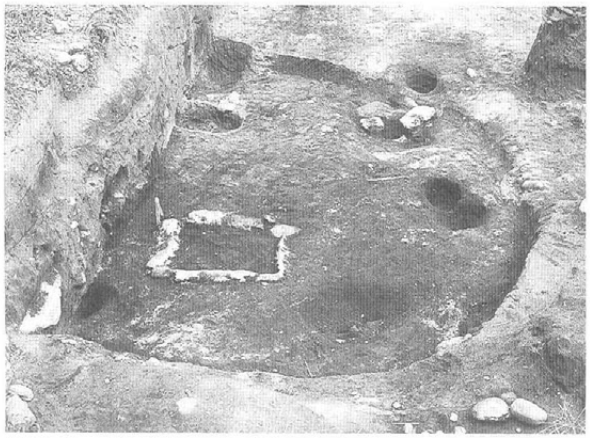


写真７　住居址１（西側から写す）

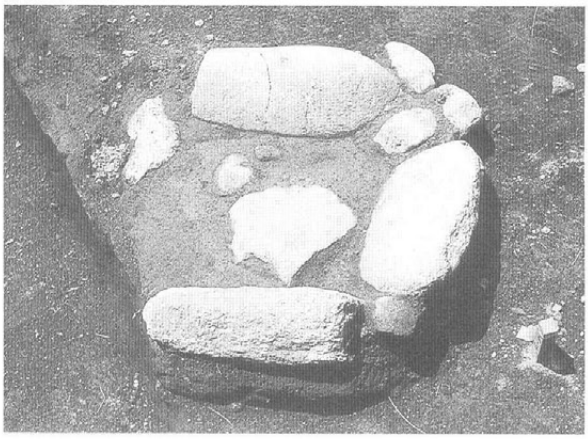


写真８　住居址２　炉址（北から写す）

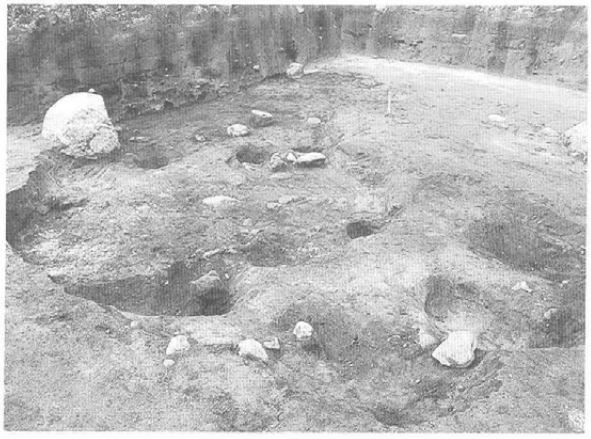


写真９　住居址３・４と土坑

写真10　配石址１下層にあらわれた焼けた住居址６床面、上部の白色は、白い砂の堆積

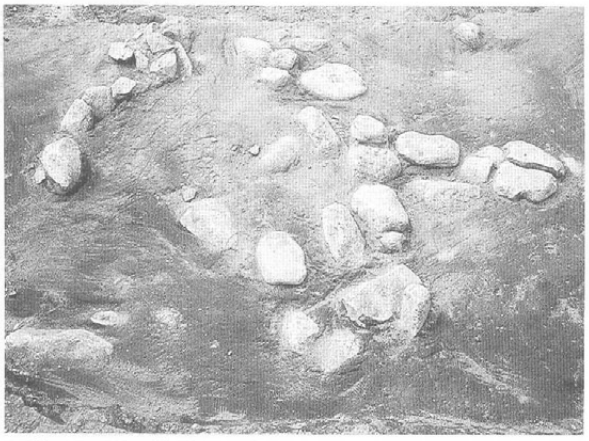


写真11　配石址２の一部

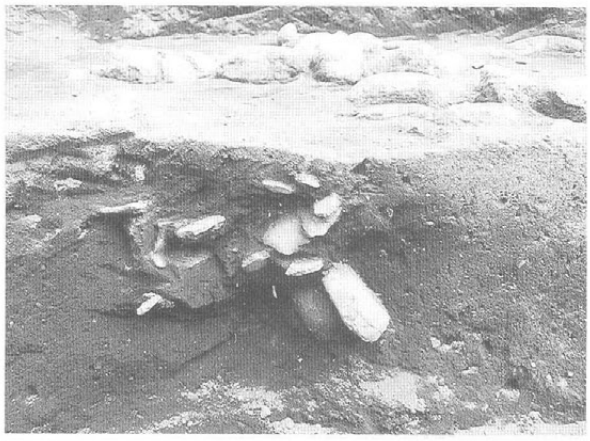


写真12　配石址２と下層に埋甕

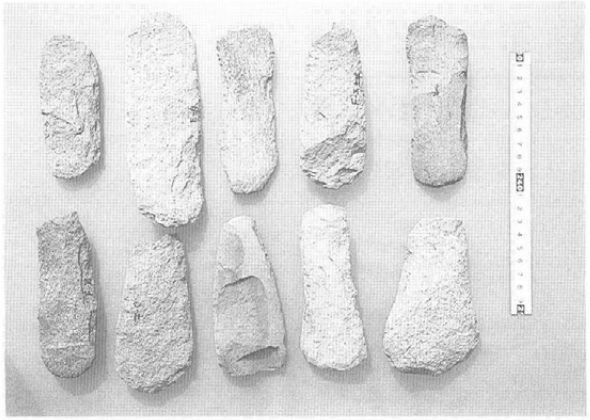


写真13　大型の打製石斧

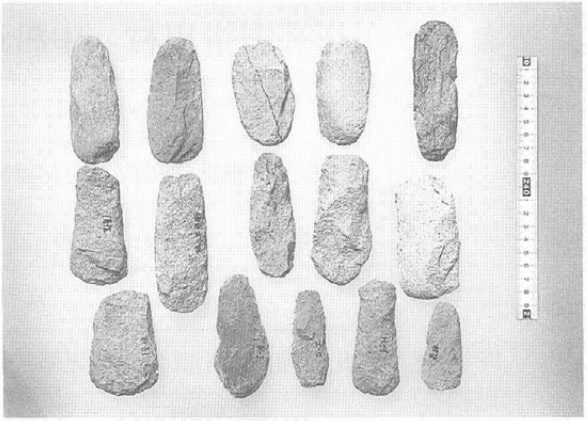


写真14　中型の打製石斧

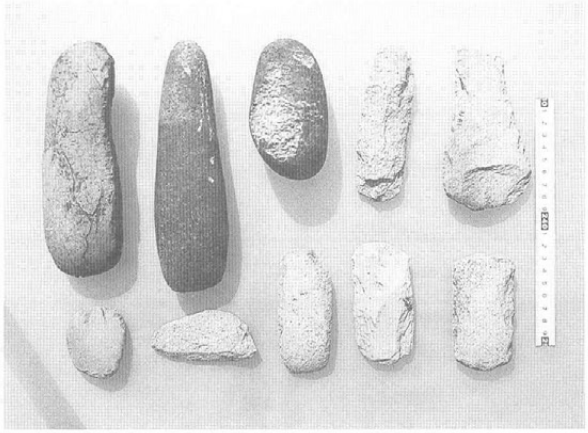


写真15　住居址１内出土の石器類

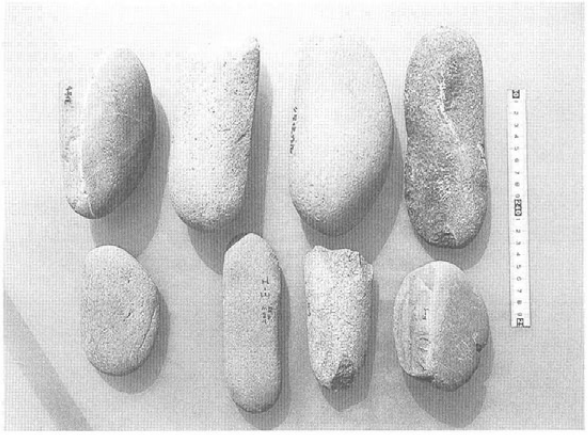


写真16　磨痕のある石

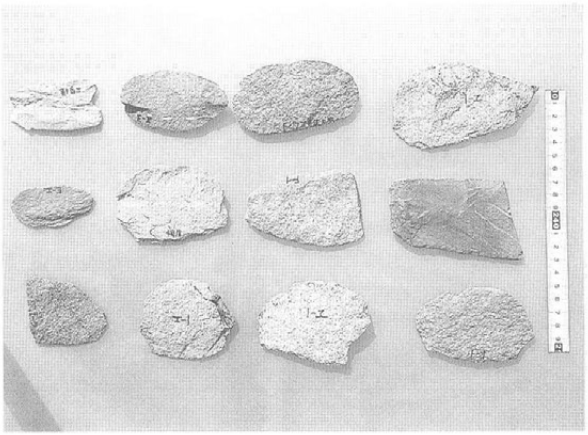


写真17　横刃形石器

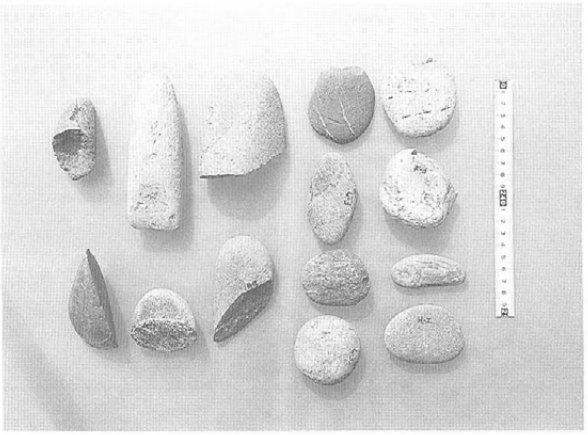


写真18　折れた石器と持ち込まれた石

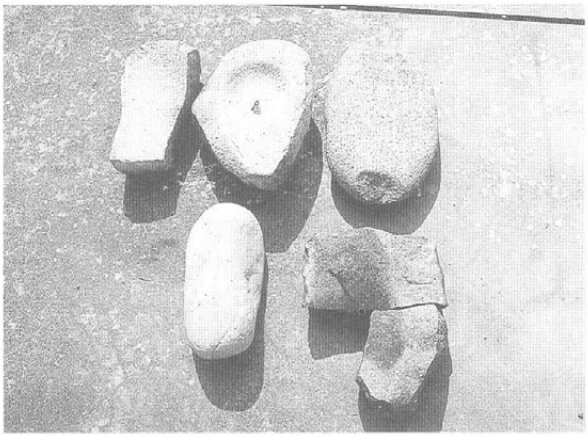


写真19　石皿　配石に使われた折れた石皿、焼けて割れた石皿、平石

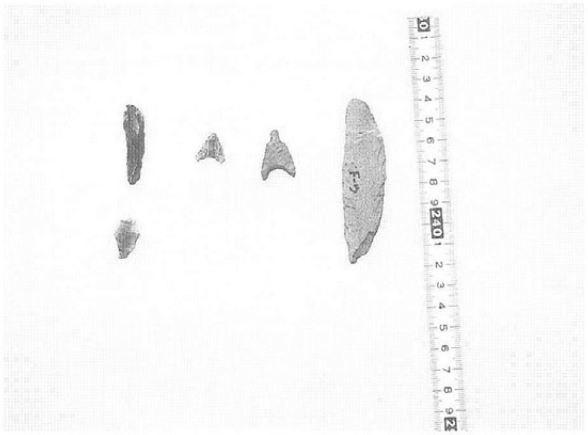


写真20　住居址１西壁出土の石鏃ほか

長野県上伊那郡中川村　中村遺跡　第２次発掘調査報告書抄録

ふりがな	ながのけんかみいなぐんなかがわむら　なかむらいせき　だいにじはっくつちょうさほうこくしょ
書名	長野県上伊那郡中川村　中村遺跡　第２次発掘調査報告書
副書名	
巻次	
シリーズ名	中川村埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ番号	第16集
編著者名	太田　保
編集機関	中川村教育委員会
所在地	〒399-3802　長野県上伊那郡中川村片桐
発行年月日	2003（平成15）年９月

ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号					
なかむら 中村	ながのけんかみいなぐん 長野県上伊那郡 なかがわむら 中川村	203860	41	35° 39′	137° 56′	2003. 06.23 ～ 2003. 09.05	580㎡	地方道 整備事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
中村	集落址 墓域	縄文時代	竪穴住居址　6 配石址　2 埋甕　3 土坑　5	土器・石器	縄文中期後葉の集落址の一部を検出した。

中川村文化財発掘調査報告書　第16集

長野県上伊那郡中川村 中村遺跡 第２次調査報告書

発行日　平成15年９月
発　行　中川村教育委員会　〒399-3802　長野県上伊那郡中川村片桐
印　刷　龍共印刷株式会社　〒395-0004　長野県飯田市上郷黒田121